

京都にて

光枝初郎

暑い、熱い、仄かに微温い、ひととひとのあいだがらが作りだす温度を有した空気が、〈周り〉が、たゆたう、流れるように、ゆらり、ゆうらりと、この街中を移動する——此処は四条。大通りからすこし離れた細い路地裏で、私は、一本の缶ビールと、枝豆を、持って、石段のうえに座っている。見えるのは天井の月。空がひろいのだ。たてものがひくいのだな、だから空に手が届きそうなのだ、と思う。人は流れる。建物はだいたい閉まっている。空いているのは飲み屋くらいさ。昏い、暗い、仄かに灯る明りが、ひととひとのあいだをつたう、示される、確認する。何処から、何処へ——。世界の端から端へ。「そこは世界の中心を通らないのでしょうか?」「中継地点などはない。全てが端だ。世界とは端の集まりである」。私も、きつと。服ごと、白のワイシャツごと、何処へでも流れる／流るる(その覚悟はできている)。移送Ⅱ旅の途中。四年も前の記憶。微温くなったビールの液体が私の喉をとおっていく、どうるるるるるん、胃のなかへ。気分が、火照る、ついで私は過去の女性の姿を引用しようとする……着物をきた女の後姿、うなじの線? 枝豆ってこんなにおいしい、表面がぷりっとしていて、唾液が集まる、から飲み込む。ビールで流す。ねえ、私はだれ。誰でもない、人称がいまはく奪されている。人称を逃れた世界で、この身体ごと幸せだ。闇夜。ここはこうふくなくまちだ。都市の外に繋がっているのはよいこと……どこへでも行ける。夢にならないように、ゆうめいにならないように、為らなかつたらそれまでさ、今は旅。もう少し行こう、もう少し歩こう、待っている、誰かが、君の為に、君の為と言ってくれる誰かの為に、貴方も、私も、外へ、向かおう——銀の月まで。(了)